

22

『医心方提要』について

小曾戸 洋, 天野 陽介

北里大学東洋医学総合研究所医史学研究所

【緒言】『医心方提要』は、嘉永～万延年間、半井本『医心方』の校刊に終始尽力した森立之（1807～85）が『医心方』の書誌、伝写、影刻をめぐる経緯を書き留め、関連文書・書簡を合綴した一冊の記録集である。

本書は戦後、石原明の所蔵となり、東大史料編纂所に資料提供され『大日本史料』（第1編之21、円融天皇、永観2年）に再編・活字収録されたこともある史料性の高い文書である。長らく個人蔵で、斯界の研究者の目に触れることはなかったが、平成22年11月の東京古典会入札会に出陳され、武田科学振興財団杏雨書屋の蔵に帰した。これを機会に本書の概要を紹介する。

【現状】平成に入ってから20余年間、虫害が甚しく進み、開巻もおぼつかないほどの状態で、目下専門業者に委託して修復が行われている。しかし幸い、昭和後期に小曾戸が矢数・宗田・杉立らの要請によって作成した複製本が存在し、これにより旧状を知ることができる。

【内容】『医心方提要』は江戸医学館の『医心方』影刻事業に直接、しかも最も深く関与した森立之の手控えであるだけに、その筆まめな性格からしても、当時の学問水準や社会状況を彷彿とさせる無二の史料である。本書には森立之自筆稿のほか、様々の原稿零葉、文書紙片、書簡類が、綴じ、貼り、あるいは挟み込まれており、これらは小島宝素・喜多村直寛・渋江抽斎・多紀元佑・舟橋宗春・海保元備・森約之の自筆、さらには佐藤元長・梶玄節・浅田宗伯・清川玄策らの筆も混ざるものである。本書によって以下のような経緯が知られる。

【考察】寛政2年（1790）仁和寺本『医心方』残巻22包が京都より江戸に送られ、翌3年多紀元恵らによって影写本2部が作成、幕府と医学館に納められた。

半井本を半井家より取出す計画は嘉永2年（1849）に始まり、阿部正弘・六郷政殷を通じて半井広明に接触を計った。

嘉永7年（1854）10月13日、六郷政殷は『医心方』31巻1箱を遠藤但馬守の辰口邸に持参。江戸医学館の関係者13名がこれを披見した。

2日後の10月15日、半井本は医学館に貸与、ただちに影写に関する細則が協議され、喜多村直寛が最終的に「医心方影写程式」を書き上げ、これに従い影写作業が進められることになった。嘉永7年11月1日より開始された影写は同11月29日（11月27日に改元して安政元年）に本文の影写が成り、12月7日には移点・初校・再校のすべてが終了した。

同年12月14日には幕府から出版許可が下り、翌々16日には校勘の役職が決定。小島春沂は「医心方縮刻程式」なる版下作成要項を草して書家渡辺源三に指示した。

校勘にあたっては半井家蔵延慶本、錦小路家蔵巻22原本の複写などの別本も集められ、資料に用いられた。この間、安政4年（1857）には多紀元堅・小島春沂・阿部正弘・多紀元听、安政5年には渋江抽斎らが相次いで没。

安政6年（1859）5月に至ってようやく『医心方』の版木が出来、以後半年にわたり版木校正が続けられ、12月17日完了して試刷本4部を作成。以後順次印刷製本が進められた。

万延元年（1860）半井本の返却命令が下り、4月、医学館において13日間、20余名がかりで半井原本と安政初年臨模本との綿密な最終校合作業が行われた。4月27日、足かけ7年にわたって医学館に留め置かれた半井本『医心方』は半井家に返納された。

同年5月3日半井家に幕府より褒賞品が下賜。8月19日医学館よりヲコト朱点を移した特製校刊本が幕府に献上。9月22日幕府は多紀・伊沢に賞与の品を賜り、翌日多紀元佑から医学館の功労者達に銀が下され、9月28日『医心方』校刻事業完成の祝賀会が盛大に催された。

これらは『医心方提要』によって具体的に知りうる史実である。